

multilingual translation >  
音声読み上げ・多言語翻訳は  
「カタログポケット」で



みず・まち・自然 エンジョイ!米子

広  
報

# よなご

11

2023  
November  
No.224

◎特集

## 米子市美術館 40年の歩み





# 米子市美術館

# 40 年の歩み

米子市美術館は、1983年に山陰地方初の公立美術館として開館し、今年で40周年を迎えます。

美術館を求める市民の声が実を結んで開館して以降、郷土ゆかりの作家をはじめ、全国的に人気のあるアーティストや知名度の高い作品の展覧会も開催し、これまでに市内外から延べ約276万人の来館者を迎えています。

今回は、市民とともに歩んできた米子市美術館の40年や、収蔵作品の一部を紹介します。

米子市美術館の中村館長に、これまでの40年の歩みや今後めざすものについて伺いました。

**これまでも、これからも  
市民とともに**

米子市美術館は、米子にも美術作品を展示する場所が欲しいという作家の声と、鑑賞する場所が欲しいという市民の声に応えるために、当時の関係者の尽力のもとに40年前に開館しました。当館で最初に開催された展覧会は市展（米子市美術展覧会）です。市展は、





戸田海笛《喜怒哀楽の図》

ブロンズレリーフ(縦185cm×横728.5cm)  
米子市美術館の玄関横には、米子市出身の彫刻家・戸田海笛のブロンズレリーフが設置されています。本作は、茨城県結城市で長年に渡り展示・保管されていた海笛の石膏作品を、米子市内の有志の働きかけにより、ブロンズレリーフとして鋳造し、2016年に米子市に寄贈されたものです。おらかな群像表現により日本神話の世界が描写されています。



市展は今年で第62回を迎えた



2019年に開催した「チームラボ 学ぶ！未来の遊園地」では、歴代最高入場者数である5万3,959人を記録



開館した当初の米子市美術館



米子市美術館 館長  
なかむら さとし  
中村 智至

米子市民の美術作品の発表と鑑賞の場であり、市民とともに歩んできた当館の象徴でもあります。

その歩みの中で力を入れてきたのは、郷土ゆかりの作家の掘り起こしです。植田正治や金畑実、戸田海笛など、この地には素晴らしい作家がいるということを全国に発信してきました。また、地元の手作家の発掘にも取り組み、鈴木康生やマツダケンなど、いち早く当館で展示会を実施してきました。今後の芸術活動のバネにしてもらえるよう、応援しています。

一方で、国内外で著名な作家の展示会も開催し、皆さんが足を運びたくなる美術館をめざしています。皆さんに満足してもらえようという美術鑑賞の場であるとともに、郷土の作家の作品を収蔵し、その魅力や価値を発信しながら、鳥取県西部の美術史を形成する中心的役割を担いたいと思います。



前田寛治《裸体》1927年



背景の暗色と対比させ、暖色系のふくよかな裸婦が映え、簡略化された構成のなかに充実した空間の厚みを見事に表現しています。女性の肌に落ちる影が強い明暗差を生み劇的な効果を演出しています。モデルは、青森から上京後間もない「ブルースの女王」淡谷のり子といわれています。

棟方志功《美の女神誕生の柵》1959年



和紙の裏から色を染み込ませる“裏彩色”の手法により鮮やかな色彩の中に、白黒の対比にこだわった3体の量感あふれる堂々とした女神像が見事に表現されています。

The Collection of  
Yonago City Museum of Art

## 米子市美術館の 収蔵作品

米子市美術館の収蔵作品の中から、  
その一部をご紹介します。

香田勝太《猫と芍薬》制作年不詳



香田は東洋の花卉図を、油絵で日本屏風のように描くことを得意としました。本作も2枚の絹本を貼り合わせ、油彩で描いた作品です。花、猫、蝶というモチーフを、色鮮やかに表現しています。

岩宮武二《「佐渡」より散髪屋(相川町)》1954-61年



米子生まれの岩宮は大阪で写真家として活動。佐渡の風景や民俗を描いた作品集を発表しました。本作は、散髪屋の幾何学的な外観と、ぽつんと停められた自転車が、島の生活の哀愁を感じさせます。

二代歌川広重《東都三十六景 海案寺紅葉》1862年



師と同じく各地の風景表現に取り組んだ二代広重が、東京・品川（曼曼寺）を描いた一点です。海案寺は紅葉の名所として古くから知られており、多くの観光客が訪れました。背景に表された水平線は東京湾で、紅葉の赤との対比が鮮やかです。

congratulations!

## 開館40周年 おめでとう！

40周年のお祝いメッセージをいただきました。

美術館が開館し、日展や、最近だとチームラボや草間彌生展など、大きなイベントや著名な作家の作品が米子で気軽に見れるようになったのは、すごいことだと思います。また、市民の美術館なので、市展も自前で開けるといっても素晴らしいことです。今後は、「米子市美術館といえばこれ」というような目玉となる作品を、いつでも見ることのできる常設展ができるようになればいいなと思います。今後の歩みに期待しています。

米子市文化協議会  
会長 小谷 幸久さん



美術館ができる前は、公会堂の会議室にパネルを立てて作品を展示していましたが、米子の宝物のような美術品を十分に展示し、適切な状態で保管できる場所がありませんでした。そんな中、米子市美術館の開館は悲願でした。今後も美術館の中身である収蔵品を充実させていくとともに、美術鑑賞の後は併設のカフェや近隣施設、周辺の公園を楽しんでもらうなど、市民にもっと親しまれる、憩いの中心の場になってほしいです。

米子市美術館後援会  
会長 福島 多暉夫さん



### 米子市美術館後援会 新規会員募集！

後援会は、美術館がより充実した文化・芸術の発信地となるよう応援する市民団体です。ぜひご入会ください！

〒米子市美術館後援会事務局 (☎ 34-0318)

勝谷木憊《雪後の大山》制作年不詳



大胆にクローズアップして切り取られた大山が印象的な作品です。

手前の険しい岩肌と異なり、淡い輪郭が施された山頂が神秘的に映ります。

河井寛次郎《流し描皿》1930年頃



河井の創作に意欲を与えた、イギリス発祥のスリップウェア(化粧土で加飾し、鉛釉などをかける技法)によってつくられた特徴的な文様は、1枚ごとに異なった表情を見せています。

戸田海笛《薄明》1924年



海笛、パリ留学中の作。モデルは友人でロシア出身の演家ジョルジュ・ピトエフです。当時新たに実験演劇の劇団を立ち上げたピトエフの、逆境に立ち向かう強い意志がそのまま作品に閉じ込められているかのようです。

### コレクション企画展Ⅱ 版画編 「奥深き表現世界」

米子市美術館が誇る364点の版画コレクションの中から、さまざまな技法による多様な版画表現の魅力と奥深さがわかる作品を展示しています。

▶会期 10月29日(日)～12月3日(日) [水曜休館]

▶観覧料 一般 330円 団体(15人以上) 270円

※11月3日(金・祝) [文化の日]、18日(土)・19日(日)

[関西文化の日]は観覧無料